

教育学部学生の学習生活と意識についての 調査研究 (第3報)

岡本 洋三
(1986年10月15日 受理)

Research on the consciousness and life of students
in the Faculty of Education, Kagoshima University
— Report III —

Hiromi OKAMOTO

1 調査研究の意図と方法

この調査は、筆者の担当している『教育行政演習』において、今日の高等教育の大衆化状況における学生の学習生活に影響を与えていると思われる要因をさぐり、彼等の学習生活を充実させる方策の手がかりを得よう、という問題意識から計画・実施された。調査項目と質問内容は、演習の過程で学生に高校時代、受験期、教養課程での生活や感想などを発表してもらい、現代の青年がかかえている問題を引き出すことを主眼として作成した。今回の調査は「教育調査の演習」ということから「質問の構成」が適切であるかどうかを実証的に検討することを主眼としたので、サンプリングは無作為抽出の厳密な方法をとらなかった。

調査対象は、教育学部の学生に焦点をあて、その特徴をつかむため他学部学生と比較できるように設定した。教育学部生はなるべく標本の偏りが少なくなるように「必修講義」を選定し、受講者(189名)に質問紙を配布しその場で回答を記入させ回収した。他学部生は「教職の講義」の受講者(40名)と演習参加学生が他学部の友人に依頼したもの(111名)である。調査の実施時期は1986年1月である。

上に述べた標本抽出方法のため、標本の構成(第1, 2表)に次の様な偏りがあることが分かっている。「必修講義」の関係から教育学部生は2年生(59年入学)が多く、他学部では3年生が多くなっている。また講義出席者にたいする調査であるので、教育学部でも他学部でも女子の割合が実際よりも大きく、留年経験率が低く目になっている。他学部の内訳は、法文学部90, 理, 工, 農, 水産学部61である。

第1表 標本の構成 (学部別の入学年度, 性別)

入学年度 学年	60年 1	59年 2	58年 3	57年 4	56年以前 5以上	不明	計	男	女
教育学部	0	124	47	14	3	1	189 ¹⁾	76	111
他 学部	1	24	90	25	10	1	151	111	40
計	1	148	137	39	13	2	340	187	151

第2表 標本の構成 (教養課程在籍期間別)

在籍期間	正規進学	半年遅れ	1年遅れ以上	不明	計	留年経験率
教育学部	160	18	8	3	189	13.8%
他 学部	104	20	21	6	151	27.2%

調査項目の構成は次のとおりである。(質問と選択肢の実際の内容は論文末尾の質問票参照)

基本属性 5問…学部, 学科, 入学年, 性別, 教養課程在籍期間

高校時代 9問…思索体験6問, 読書の好き嫌い, 親友の有無, 大学進学目的(2選択)

教養課程在籍時 6問…大学生活への期待(2選択), 充実感, 充実感の対象(2選択), 出席状況, 受講の主体性, 講義の影響(学問的な感受性)

専門課程 8問…充実感, 充実感の対象(2選択), 出席状況, 受講の主体性, 講義の影響(学問的な感受性), 所属学科の適否, 勉強時間

学習成果の自己評価 4問…大学生としての一般的教養, 学部共通基礎学力, 専攻基礎学力, 自己の専門についての自信

大学観, 学習観 11問と自己の努力目標(3選択)

社会観 5問, 人生観 8問, 職業観 7問, 大学と就職 5問

2 学生の高校時代の生活と大学の学習生活との関連

この調査の対象学生の高校時代の生活と大学の学習生活についての回答を数量化3類によって解析した結果について示そう。取り上げたカテゴリー68項目と, それぞれの回答実数を全サンプル(全体), 教育学部男子学生(教男), 教育学部女子学生(教女)について示したのが第3表である。3類の解析によって引き出されたカテゴリーの相互関連の様子は第1~3図のとおりである。第1図は全サンプル(340), 第2図は教育学部男子学生(76), 第3図は教育学部女子学生(111)である。教育学部の解析においてはカテゴリーNoの1~3, 8~9は不要であるので除いてある。また解析対象のサンプルの全てにおいて回答がなかった項目(男子では25=家出についてよく考えた, 女子では7=56年及びそれ以前の入学者)は除いてあるので, その番号は欠番である。

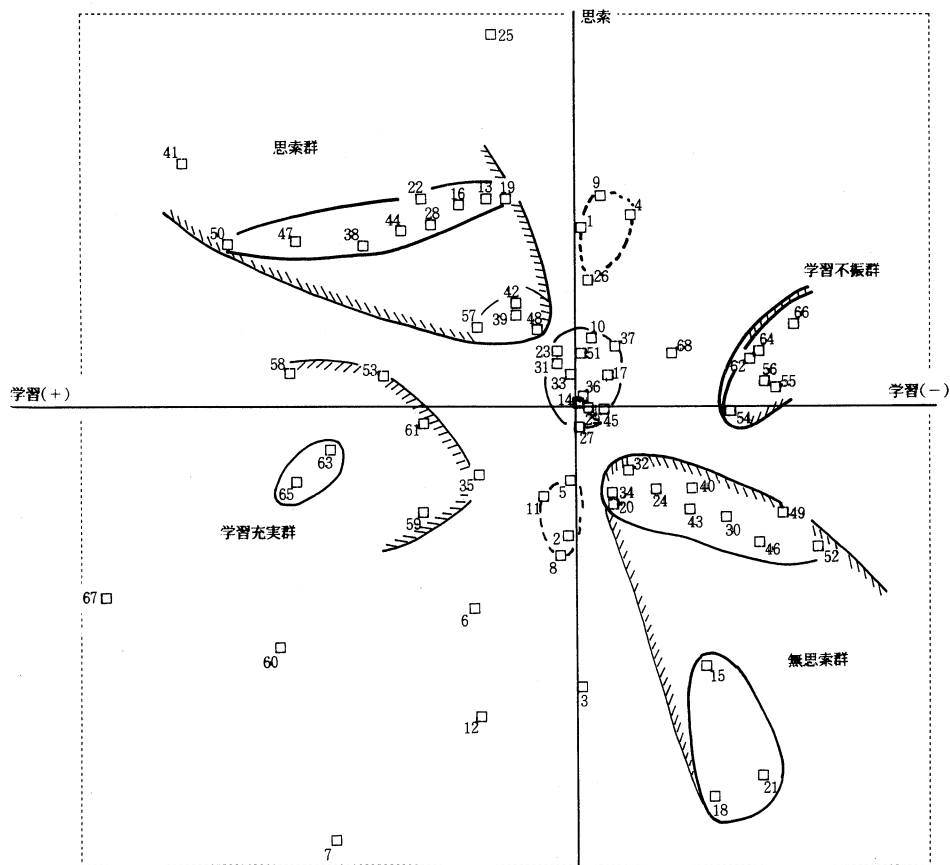
第3表 カテゴリーとその回答数（実数）

No	カテゴリーの内容	全体 340	教男 76	教女 111	No	カテゴリーの内容	全体 340	教男 76	教女 111
1	教育学部	189	—	—	3 5	教養生活充実	46	11	13
2	法文学部	90	—	—	3 6	教養生活不満なし	199	50	63
3	理系学部	61	—	—	3 7	教養生活むなしい	94	15	34
4	59年入学	148	40	82	3 8	教養講義関心 大	38	9	13
5	58年入学	137	24	23	3 9	教養講義関心 中	136	28	51
6	57年入学	39	8	6	4 0	教養講義関心 小	164	38	47
7	56年入学以前	13	3	—	4 1	教養講義影響 大	16	5	2
8	男子	187	—	—	4 2	教養講義影響 中	162	29	66
9	女子	151	—	—	4 3	教養講義影響 小	159	42	42
1 0	正規の進学	264	59	100	4 4	専門生活充実	74	18	36
1 1	半年遅れの進学	38	12	5	4 5	専門生活不満なし	214	50	64
1 2	1年以上遅れ進学	29	4	4	4 6	専門生活むなしい	51	8	10
1 3	現在の生, よく	96	17	34	4 7	専門講義関心 大	78	24	30
1 4	現在の生, ときに	181	42	61	4 8	専門講義関心 中	114	23	42
1 5	現在の生, 考えず	62	17	15	4 9	専門講義関心 小	147	29	39
1 6	将来の生, よく	94	20	33	5 0	専門講義影響 大	59	14	25
1 7	将来の生, ときに	195	47	68	5 1	専門講義影響 中	182	39	62
1 8	将来の生, 考えず	51	9	10	5 2	専門講義影響 小	98	23	24
1 9	職業, よく	159	35	70	5 3	学科適性あり	148	35	50
2 0	職業, ときに	140	33	37	5 4	学科適性わからず	151	35	43
2 1	職業, 考えず	41	8	4	5 5	学科適性なし	41	6	18
2 2	人生, よく	58	9	22	5 6	勉強1時間以下	153	39	58
2 3	人生, ときに	115	30	32	5 7	勉強1～2時間	105	24	33
2 4	人生, 考えず	167	37	57	5 8	勉強2～3時間	36	5	11
2 5	家出, よく	11	—	6	5 9	勉強3～4時間	25	3	6
2 6	家出, ときに	49	11	18	6 0	勉強4時間以上	19	5	3
2 7	家出, 考えず	279	65	87	6 1	教養学習自信あり	173	43	42
2 8	勉強の意味, よく	74	15	25	6 2	教養学習自信なし	167	33	69
2 9	勉強の意味ときに	187	46	58	6 3	学部学習自信あり	136	32	39
3 0	勉強の意味考えず	79	15	28	6 4	学部学習自信なし	204	44	72
3 1	読書 好き	242	44	88	6 5	専攻学習自信あり	142	36	35
3 2	読書 嫌い	98	32	23	6 6	専攻学習自信なし	197	40	76
3 3	親友 いた	287	64	99	6 7	専門学習自信あり	51	12	11
3 4	親友 いなかった	51	11	12	6 8	専門学習自信なし	288	64	100
					総数		340	76	111

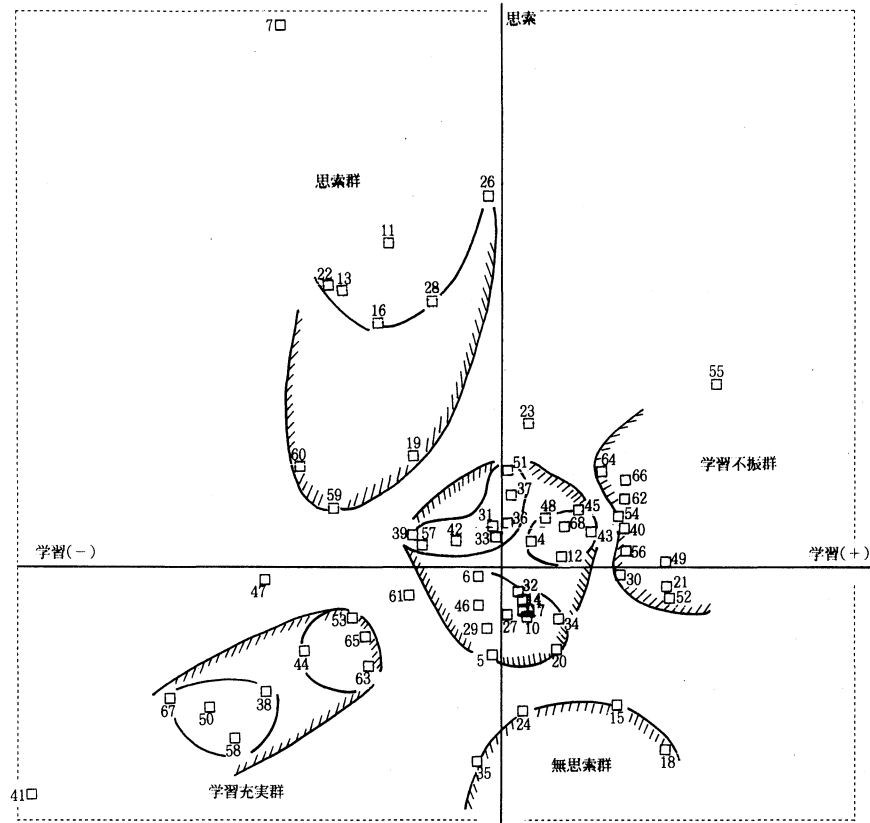
3類の計算の結果求められた、第1から第3までの軸の相関係数(固有値の平方根)は第4表のとおりである。以下の解析では第1軸と第2軸の組合わせを対象としている。いずれの場合も、第1軸(X軸)は学生の学習生活の状態についての質問にたいして好ましい回答であるかどうかを分別し、第2軸(Y軸)は高校時代の思索の厚薄で分別していると解釈できる。この2つの軸によるカテゴリーの配置(第1~3図)を解釈すると、5つの関連群を見出すことができる。すなわち、中心部に位置する「A 平均的な学生の回答群(平均群)」とその周辺に位置する「B 高校時代の思索経験の豊かな学生の回答群(思索群)」「C 学習生活の充実した学生の回答群(学習充実群)」「D 学習生活の不満足な学生の回答群(学習不振群)」「E 高校時代の思索経験の乏しい学生の回答群(無思索群)」である。

第4表 各軸の相関係数(固有値の平方根)

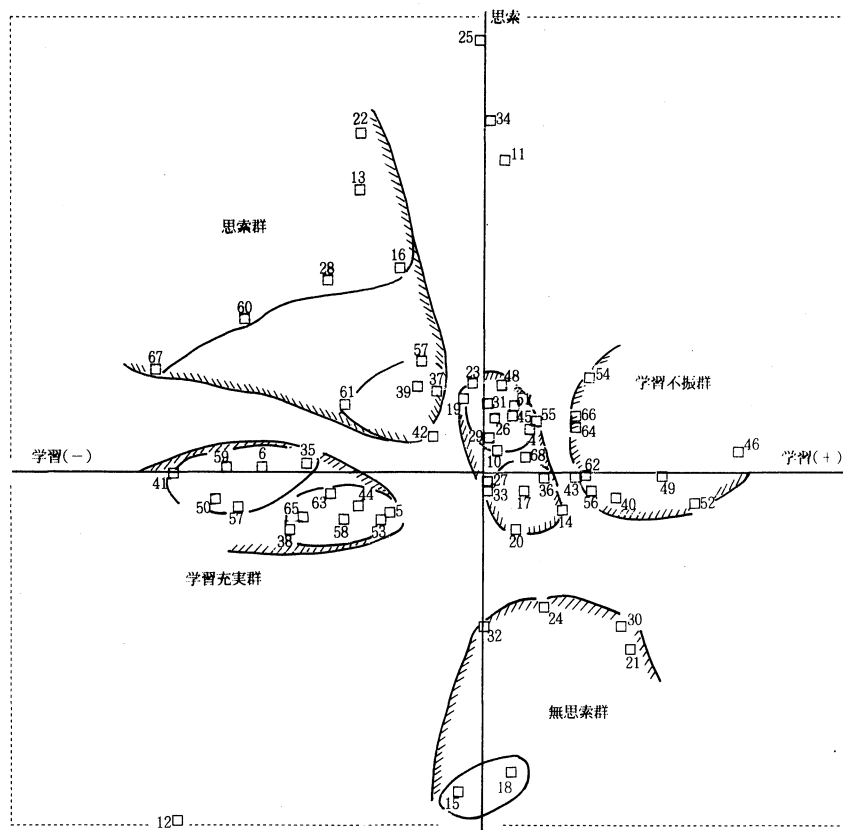
対 象	サンプル数	第1軸	第2軸	第3軸
全体	340	0.356	0.343	0.322
教育学部男子	76	0.473	0.381	0.352
教育学部女子	111	0.427	0.362	0.326



第1図 高校時代の思索と大学の学習生活との関連(全サンプル)



第2図 高校時代の思索と大学の学習生活との関連（教育学部男子）



第3図 高校時代の思索と大学の学習生活との関連（教育学部女子）

3類の解析によって得られたカテゴリーのプロット図(第1図~第3図)は、回答パターンの似ているサンプルによって選択された回答(カテゴリー)は相互に接近するように配置されているので、逆にその接近しているカテゴリー(回答)の群から回答パターンの似ているサンプル(学生)群の特徴をつかむことができる。そこで、サンプル全体(教育学部生と他学部生をまとめた学生全体)、教育学部男子学生、教育学部女子学生のそれぞれの回答のパターンを比較することによってそれぞれの学生群の特徴(回答パターンの特徴)を引き出すことができるし、またそれぞれの回答にそれらの学生集団が与えている意味内容の違いを明らかにできる。

3類の解析では、サンプルとカテゴリーが同時に数量化されるから、サンプルやカテゴリーの図上の位置(座標)は、1軸(この場合は学習状態の良否)と2軸(この場合は思索の深淺)で与えられた数値によって決定されている。したがって、サンプルの平面上の位置によってその学習や思索の状態を推測することができる。以下の記述では、プロットされたカテゴリーの内容によって、サンプルの特徴(回答のパターン)を説明しているが、いうまでもなく個々のサンプルはすべての質問になんらかの回答をしているのである。ただ、この記述以外の回答状況は、XY2軸の平面上にプロットされた位置から推定するほかはないので、実証的に説明することは困難なのである。

なお、以下の表でカテゴリー番号を括弧でくくっているものはそれらが群を形成していることを示すものである。また、本文では回答の内容(選択肢で与えられている)は初出の時はできるだけ具体的に紹介し、その後そのカテゴリー番号を()内に記し、2度目からは適当に略記して番号を記すことにした。

A 平均的な学生群の回答の内容

第5表 平均的な学生群の回答の内容(カテゴリー番号)

調査対象サンプル全体	教育学部男子学生	教育学部女子学生
(10, 14, 17, 23, 27, 29, 31, 33, 36, 37, 45, 51)	(31, 33, 36, 37, 39, 42, 51, 57) (4, 12, 43, 45, 48, 68) (5, 6, 10, 14, 17, 20, 27, 29, 32, 34, 46)	(4, 10, 19, 23, 26, 29, 31, 45, 48, 51, 55) (14, 17, 20, 27, 33, 36, 68)

サンプル全体の平均的な学生の特徴は、教養課程を正規の期間で修了(10)している学生で、高校時代は、現在の生き方(14)、将来の生き方(17)、人生について(23)、勉強の意味(29)などを、ときどき考えたことがあり、家出については考えたことがなく(27)、読書は好き(31)で親友のいた(33)学生である。彼等は専門学部の生活にはとくに不満を感じていない(45)し、専門の講義で強い影響を受けたものが2~4科目(51)はあるが、教養時代の生活ではとくに不満は感じていない(36)者とむなしい(37)と感じた者とに分かれている。ここで(36, 45)が原点付近にあり平均的な多くの学生が教養・専門の生活に一応満足していることが示されているが、「むなしい」(37)と

感じている学生が2軸（思索）の上方に位置していることに注目したい。それはこれらの学生は高校時代に思索的であった学生と思われるので、教養時代にむなしいと感ずることのなかには教養生活の現実にたいする真面目な批判意識が含まれているように思われるからである。この平均群はよくまとまっており、以上の意識や状態が共有されていること、またこれらの事柄の間に密接な関連があることがわかる。

教育学部男子学生では、この平均的な学生はやや広がりを持ち、3つのタイプに分かれている。

その1は、大学の学習生活に一応適応していると見られる学生である。彼等は、高校時代読書が好き(31)で親友のいた(33)学生で、教養時代の生活には、とくに不満は感じていない(36)者とむなしい(37)と感じた者とがいるが、興味・関心をもって受講した教養の講義が4～6科目(39)あり、また強い影響を受けた講義が教養でも専門でも2～4科目(42, 51)あり、通常1日1～2時間は勉強している(57)。

その2は、2年生(4)と1年以上留年した者(12)が主で、教養の講義から強い影響を受けた科目がほとんどない(43)が、専門の講義には興味・関心をもって受講したものが4～6科目(48)あり、専門での生活にはとくに不満はない(45)学生である。しかし自分の専門の領域についての自信はない(68)。このグループは、教養課程の学習においては否定的な状態が見られるが、専門にはいってからはいづらか学習に積極性がでてきた学生で、学習不振群に極めて接近した位置にある。

その3は、正規の期間で進学(10)した3、4年生(5, 6)で、高校時代、読書は嫌いで(32)、親友はなく(34)、家出については考えたことがないが(27)、現在の生き方(14)、将来の生き方(17)、将来の職業(20)、勉強の意味(29)などをときどき考えたことのある学生である。この回答は普通の学生に予想されるものであり、その位置も1軸（学習軸）ではほぼ中心部にあり、特に学習面で否定的であるとは言えないが、専門の生活にむなしさを感じている(46)という点で、前の2つのタイプにくらべ精神的心理的な面にやや問題があるように思われる。

教育学部女子学生では、平均群はやや広がりをもっており、2年生(4)で正規の期間で進学(10)し、まだ所属学科が自分に適していない(55)と思い、自分の専門については自信がない(68)学生で、次の2つのタイプがある。

その1は、高校時代に将来の職業についてよく考え(19)、人生(23)、家出(26)、勉強の意味(29)についてはときどき考え、読書が好き(31)で、専門の講義で興味・関心をもって受講したものが4～6科目(48)、強い影響を受けた科目が2～4科目(51)あり、専門課程の生活にとくに不満はない(45)学生である。これはかなり学習生活が充実していると見られる。

その2は、現在の生き方(14)、将来の生き方(17)、将来の職業(20)についてときどき考えたが家出については考えたことがない(27)、親友のいた(33)学生で、教養生活に不満を感じていない(36)、一応大学の学習生活に適応していると考えられる学生である。

